

「あきらめ」のもう一つの顔

—初出稿から見た異端の愛と悲しみ—

大 森 郁之助

I

結果的には数年間に過ぎなかったその盛時の終り近い頃には「とにかく樋口一葉以後の第一人者」(近松秋江「人見知りをする女」、『新潮』大6・4)という云い方もされた田村俊子だが、先蹤一葉に比べてその現在の地位は甚だ不遇という他ない。包括的な内容の単行研究書と一往いえそうなのは瀬戸内晴美『田村俊子』(昭36・4文芸春秋新社刊)一点のみ(対する一葉は約四十点)、全集は未だ無く、選集がオリジン出版センター刊三年の博文館版以下九種)と、殆ど埋もれてしまっているといえよう。

従ってその出世作「あきらめ」(明44・1・1〜3・21大阪朝日新聞八十回連載)についての各種解説論評の類も又、作品本文の十分な分析検証を経てのものとは云い難いかに思われる。この点は、以後の解説類で必ず参考文献として挙げられるに到っている前出瀬戸内著といえども、例に洩れないのではないか。その一端を示せば、同書で

この作品が、非常にあわてて短期間に書かれたと「木乃伊の口紅」(引用者註、大2・4)の中に描写されているが、その証拠のような誤りが、選者にも見落され(同、「あきらめ」は大阪朝日の懸賞応募

作)、本になった時もそのまま伝わっている。(略)こんな誤りが、選者にも読者にもまた作者じしんにも見すごされて来たとは、やはり明治はのどかな時代でありけりといふべきか。

と、したり顔に(右引用部分の末尾など、そういえよう)指摘するのは、女主人公「が重ね草履をはいていると描写してあるその日、いつのまにか靴とすりかわって」しまい、「重ね草履がぬかるほどの道を飛び飛びに歩いて帰った富枝がその足から靴をぬぐという」条である。

たしかに、この「すりかわり」は初出時第三回と第四回との間で、つまり「草履」と書いた翌日掲載分で「靴」に変わっているもので、以前の設定を忘れた、とも、書き疲れた結果、とも、弁解のしようのない粗忽ではある。しかし、明治大正と過ぎて昭和に入っても、例えば、川端康成の「雪国」で、明和と過ぎて昭和に入っても、例えば、川端康成の「雪国」で、島村と駒子の出会うの翌年、三度目の訪れの際、駒子に「あなたが来はじめてからだって、もう三年」と一年誤算させ、続く地の文でその誤算をもう一度なぞっている(関良一氏「雪国」考、昭46・4教育出版センター刊「川端康成の人間と芸術」)。同じく堀辰雄の「菜穂子」では、副主人公都築明の母性思慕の擬似対象おえふの年齢が、章によって三歳以上、姉妹篇「楡の家」との間では数歳の幅で、変動している(小稿「菜穂子」年立考、札幌大学女子短大部紀要十一号)。「雪国」も「菜穂子」も、現在流布している定稿

でのなしである。

これらは「あきらめ」でのようにたった今さきの記述とのくいちがいというのではないから、狭義の粗忽とは違うだろうが、事の重大さは履物の種類の比ではあるまい。明治をのどかというなら昭和ものどか、明治の読者や評家がのんびりしていたなら瀬戸内氏も「あきらめ」に対した時以外はのんびりしていることになろうか。

といっても、何も「あきらめ」の粗忽を弁護しようというのではない。そうした失策に対してやや度を失する観の拘泥を示す——その程度、作品の読みを土台とした瀬戸内著（もつとも、作品抜き作家論も世にはあり、本書もその類だとすれば、はなしは別）が最基本文献視される、「あきらめ」乃至田村俊子研究の底の浅さ——この作者がしばしば論評の対象たり得た大正前期の印象批評・読後感的評論のレヴェルを未だ脱し切っていない、と云えそうなこと（昭和期には既に研究意欲をそそる作家でなかったせいだろうか）が察せられればよいのである。

さて、そのような「あきらめ」論評に於てしばしば指摘される、この作品の「問題」点は、およそ次の三項にまとめられるかと思う。

- ① 登場人物（の関係）や事件の過多紛雜
- ② 女主人公富枝の△新しい時代の女性としての自覚▽の、未熟
- ③ 題名と、内容——女主人公の言行・心情との、矛盾

ところで後先になったが、この小説の梗概は次のように要約されよう。

女子大生荻生野富枝は新聞懸賞に脚本が当選するが、大学から指弾され（引用者註、虚名を望むものとして）、姉のとつきさきの作家の家に身を寄せ、愛する妹の養家の下町花柳界情緒や同性愛関係にある下級生の政府高官の家庭の空気に浸りながら、自活力ある目覚めた女の道に努める。しかし、自作上演の成功を見ながらまえまえから抱く悲しいあきらめの下で郷里岐阜の祖母継母への義理に生きようと決意して帰省してしまう。

（講談社版『日本近代文学大事典』第二巻、この項酒井森之介氏）

そこでさきの「問題」点に戻ると、①は、かりに登場人物や事件が比較的に（甚だ漠然とした云い方だが、例えば同程度の長さの新聞連載小説の中で）多くても、それを紛雜と難ずるか、変化に富むと賞するか。究極的には評者それぞれの好み、精々客観めかしても文学理念に帰することと思われるので、ここでは言及を省く。

②も、もう少し重い意味で、かかずらう愚を避けたい。愚と謂う所以は、ここで△自覚の未熟▽とされるのは女主人公が自己の才能の開花を見ながら祖母継母への義理を優先させて帰郷することだが、自らの意志によって、義理を重しとした結果の進退がなぜ△自覚▽の未熟ということになるのか、である。自覚とは、広義、自己の思想を確立しそれに基づいて自己の行動を律することではなくて、その結果自己の直接の利得愉楽を第一とする場合のみを指す、と考えるのだろうか。それならば、例えば献身犠牲を尚とぶクリスチャニズムは、これらの論者に於ては欧米文化乃至近代ヒュウマニズムに於ける中世的残滓として、近代日本女性の自覚を云々する際に典範視されるのが通例の欧米近代精神一般から峻別除外されているのだろうか。

いや、自己の意志による犠牲一般はよろしいが、△義理▽という理念を経由する場合のみは宜しくない、なぜなら△義理▽は前近代の人間関係の要訣だったから、とでもいうのだろうか。それなら、「あきらめ」では△義理▽の語がもっぱら使われてはいるものの、時には「人生に対する道」（刊本（初刊明44・7金尾文淵堂版、以後各版殆ど同文）第二章）とか、帰郷直前になると「唯祖母に対する愛だけ」（二十九章）ともあるから、義理に発しはしたがいつか愛に変わっていたのだとでも云えば弁護は成立するのかも知れない。しかしそもそも、前近代に於て重視されたものなるが故に、——結果として風潮好尚の異なる近代人には普通好まれず扱ひ取られないものだ、という情勢論なら判るが、近代人として扱ふべきでない、

扱ぶのは誤りだ、といった価値論は如何なものか。

前代に於ける尊重或いは軽視は次代での引き続いての尊重・軽視を必然ともしまいが、扱ひの逆転をも、自動的に必然とはしないだろう。要は前時代の処遇ではなくその内容であって、△祖母継母の恩義に報い、家族間の秩序を支えるための▽進退決定はなぜ近代人（も、人間ではある）として自覚未熟なのかというところまで溯っていない限り、単純素朴な「古いもの嫌い」の自己正当化と区別し難いのである。

——といった反論の、論理の粗さは承知しているので、これは反論の対象である△自覚未熟▽論の、その論理の精粗に合わせた結果である。忌憚なくいえば②の「問題意識はじつは思想の膚浅か思考の粗笨か（或いは、その複合）の替称としか解し得ず、従ってこれ以上言及する価値を認め難い。

この他に、自覚の△未熟▽でなくて、心理的に△不自然▽という云い方も見かける。しかし、動物的本能の発動などについてならこうなるのが自然という云い方が出来るとしても、多数の要因が複雑に絡み合った心理のうごきについては、——展開の各段階毎にならともかく、帰郷の決意という最終結果（という）と、実質的にはその心理総体・全過程と殆ど同じことだろうが）について、こうなる筈のものなどという法則など立て得ないことは、心理学の常識以前である。帰郷の決意△不自然▽説は、評者本人の価値観や生き方を人間の普遍性と錯覚したか、または詐称したものとしてみれば、ありえまい。

そこで最後の③だが、これは

女主人公が「あきらめ」て田舎の家に——祖母や義母の淋しく暮している田舎の家に帰るといふ結末なのだから、それは当然敗北とか後退とかいう意味を持つものになるのだらうと思うのに、女主人公はその帰郷にむしろ積極的な意義を認めて、従ってそれに反対する姉の都満子をもっぱらわからずやとして軽蔑するようなことになっている。わざわざそういう帰郷を作品の結末に持って来たり、そういう作品に

「あきらめ」などと表題していることの意味が、それですっかりボヤけてしまっているのである。

（片岡良一氏「田村俊子の生涯」、『文庫』昭27・8）
という着眼である。

もっとも、この△矛盾▽はむしろこの逆の形で扱えられるのが妥当かとも思われる。帰郷に積極的意義を認めるのは作品途中で生じた変化（女主人公の心境の）などではなく、女主人公の立場の基本、プロットの大前提なのであって、刊本第二章（初出第五、六回）に既に、
義理を弁へた継母や、老衰した祖母に安心をさせなければならぬ義務がある。

一分時なりと忘れては済まぬと思ひ染みてゐる。

自分だけの人生に対する道が尽せないことになる。

自分も必ず何物か犠牲にしなければならぬに定つてゐると観念する。其れを無意義だなど、悲観するのを我儕だと自覚する程、自分は利口に生れ附いてゐるのだと、富枝は悲しく断念めてゐた。

と、繰り返し、その選択の倫理的正当性が述べ立てられている。勿論、その合間には、右引例の最後に△悲しく断念▽と云うのと同様、自分の身体が重い鎖で岐阜の方へ結び附けられてある様な気がして、唯々鬱陶しくなってくる事がある。

都の風は面白い。（略）捨てずに済むものなら都を捨てやうとは思はぬ。

とか、又、作品の終り近く、岐阜から継母が富枝の帰郷の意志有無をただしに上京した際にも、

富枝は平生から（略）自分の負ふべき責めも心得てはゐるだけ共、（略）そこに急に解決しなければならぬ問題が起つた様で煩累はし、かつた。

翌朝富枝は軽い愁ひを抱いて母に逢つた。

(共に二十七章、傍点引用者)

等とあって、倫理的選択に犠牲への意志の結果が心理的・感覚的愉楽とも合致するなどと言っているわけではない。だがその感覚的不快、心理的苦痛を包含したトオタルとして、書き出して程なくこの作品中で展開する事態以前の時点での、かつ、くだいようだがともかくも富枝自身の意志による選択として示されているのだから、その選択(の理由)——の正当性——は作品展開の前提条件(展開を通じて変容し、覆えることは有り得よう)の一つである。従ってそれに反対する姉が正当な判断に同じ得ぬ者として軽蔑されるのは当然で、矛盾とすべきはそうした選択を題名で「あきらめ」と称びなしたことの方であろう。

云いかえれば、題名を離れて行く内容が問題とされるのではなく、内容を離れて付けられた題名が不審とされ、そうした命名の真意が探られるのが順序と思われるのだが、次に掲げる和田謹吾氏の文学史的(或いはむしろ文壇史的)視点からの訂正意見も、△矛盾▽する——かに見える——二者の中の、題名の方に、片岡氏の見落した(ということになる)含意を指摘している。

作者がここでいう「あきらめ」とは、△利口に生れついた▽悲しみ(引用者註、前引「あきらめ」二章)である。この点は、実は抱月(同、島村)が「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」のなかで、自己の△聡明▽が世俗の道徳を破ることを躊躇させて△あきらめ▽にたどりつくると論じていた(同、抱月文では「諦め」と表記)のと、全く同じ論理である。そこに、選者を計算に入れた(同、抱月は大阪朝日の懸賞募集時の選者の一人)筋立てということも考えられるわけだが、(略)従来とかくこの△あきらめ▽という意味を、筋に捉われて、富枝が東京での生活の現実には敗北して、あきらめて田舎に帰って行くと解釈していたのは誤まりであろう。(同、続けてその△従来△の解釈▽の例に前引片岡文を引いている。)

(木乃伊の口紅・あきらめ)、『国文学』昭43・4)

すなわち題名(△主題?)の「あきらめ」を、いわば自然主義末期的な、やや特殊△少数派的な用法と見るわけだが、近縁とは謂い難いこの作者・作品にそうした用法を想定する裏付けとして、選者の用法との相通により選者の意に叶うことへの期待をも、臆測する。極めて周到な考察というべきだろうが、その用語法の特殊性は、効果の予想と表裏の関係の懸念も生む。

島村抱月への狙いというのはいかにも有りそうなこととして、^(註)しかし、作者(並びに、彼女に懸賞応募を勧めたという、文壇歴が先輩で文壇事情にもより通じていた筈の夫田村松魚)の念頭には、他の二人の選者、夏目漱石(実際は森田草平が代理)、及び、俊子・松魚共通の師であった幸田露伴の存在が、全く浮かばなかったとは考え難い。だがこの二人は、それぞれ別の意味ではあっても抱月とは文学観を異にし、当然、△あきらめ▽の語の用法・思想への理解と共感も抱月のようにではあり得まい。また、次の段階の問題ではあるが、幸い当選した場合の文壇諸評家・一般読者の受け取り方も、無視は出来なかつたろう。しかし自然主義陣営の中でもかなり孤独な袋小路に入りつつあった「序に代へて……」に通ずる用語ということは、逆にいえば、抱月とその限られた追隨者以外の大多数には理解され難く、少なくとも、共感とそれ故の評価は期待し難いということではなかつたか。

それに、とりわけ一般読者についていうなら、新聞小説の読者層の質とすることは云わないとしても、新聞連載小説という性格ゆえの読み飛ばされ易さ(深く考え込まれ難さ)ということもある。専門評家にも「純文芸の立場より見て、嫌らぬ節も少しとせざれど」(『中央公論』明44・8「新刊批評」)「厳肅なる文芸批判の眼から見れば、多少技巧に捉はれたる譏は成功したものと言へる」(『ホトトギス』明44・9「新刊紹介」、いずれ

も傍点引用者」と、肯定評でも差別意識はつきまತ್ತたようだから、条件は悪かったろう。和田説に云うような作者の「真意」は、題名の「あきらめ」と富枝の積極的意義の主張との矛盾感を懐いた読者の大部分（もともと、数からいえば抑、そんなことに気づかない方が多かつたろうが）に通じなかつた可能性が濃かろう。

しかし、その結果右の大部分は不納得のまま、或る種不満感のままに了つたろう——それで済まされたのだらう、と考えるのは、作者の用意と大多数の読者の鑑賞力とを見くびり過ぎる恐れはないか。

この「矛盾」は作品本文相互間の——或る設定や記述と他の個所のそれとの矛盾（例えば前引草履と靴のすりかわりのような）とは違って、通常の読者の理解鑑賞に直接障ることは少なからうが、読者側と作者側との細部への配慮・こだわり方の差を考えれば、だからといって作者も余り気にかげなかつたろう、とはいえない（非は特殊な用法を理解しない読者の不敏にある、と居直つても、不評の被害者は作者の方である）。そして本質的には、草履と靴の問題よりは重大な筈である。

一方、読者の側からいえば、いったい、女主人公の「主張」は作品全体の中でどこまで決定的な意味を持つのか、という問題がある。自分の帰郷の積極的意義を周囲に対して主張し、恐らく、それによって自分にも言い聞かせている「表明」は、直ちに、この作品に於ける帰郷の正統的解釈になるのか、どうか。

日露戦後の時期だから出征兵士或いは戦死者とその家族といった状況为例にとれば、登場人物はもっぱら「お国の為」「家門の名誉」を口にしていく作品に心配や悲痛の意の題名が付されている場合、正常な読者は、口にされていない当事者の真情、又は自覚されていない客観的事態を、その題名によって気づき、或いは、得心しよう。それと事情は全く同じではなくとも形象としてはほぼ同様に、「あきらめ」に於ても、富枝が理性的に自分に言い聞かせ周囲に向かって主張するところだけで決めず、作者が描

き出す客観的状況や富枝が心中で押し伏せようとする葛藤をも視界に収めれば、それ相応の、世間一般の用法での「あきらめ」的「断念・後退・敗北的な心情が——口では気丈にそう言うものの、式に——浮かび出て来る、といったことはないのだろうか。

もしそうしたことが有るなら、単純に解した（和田説でなく、例えば片岡説的に）題名とも別段の障りなく照応し、抱月流人生観に無縁な読者も矛盾感などは懐くことなしに済もう。

それに、錯覚してはなるまいが、「利口に」生まれついた故の「断念」と謂ったところで、前半部の要因は重要にしる、大枠としては後半部の中での話である。「断念」される願望・欲求など何もなしに、ただ醒めた知性だけが光っているわけではないのだから、「断念」感——片岡説のように「敗北・後退」というと強過ぎるとしても、喪失・挫折・不成就等の実感はしかと存在することを前提とする。いや、それが十分な切実さを以て本人に迫り蔽い尽くそうとしているのでなければ、利口さとか聡明さとかを云い立てるのが大仰というものだらう。つまり、「断念」感が仮り初めならず看取られることは、和田説にとっても必要なのである。

だが、それは意外と容易ではないようだ。

例えば先ず思い当たりそうな、帰郷による作家修業の断念という、折角思い定めたばかりの人生行路の挫折（？）の「実質的重さ」だが、富枝の帰郷を希いつつも、彼女が始めたらしい「芝居を作る」という「商売は東京に居なければ出来ないものか何うか」「その様子で阿母さんにも分別がある」と選択の余地を残す継母に対して、富枝は「自分のしごとは田舎にゐても出来ることだから」と答え（二十八章）、義兄も又、口惜しがる妻を「田舎へ行つたつて出来ない事はない」と宥める（二十九章）。共にその場を収めるための言葉であるにしる、事実全くの不可能事ではなくてハンディキャップにとどまる（甚だしいハンディキャップであるにしる）と考へておられるのではないか。それは一時の帰国か郷里に永住するのとも関係しよ

うが、その点は、姉は「もう再び東京へは（富枝が）出られないものと思ふほどに騒」ぐものの、富枝自身は出立直前の身辺整理の際にもまだ「一時だけでも岐阜へ行くと定めてからは」（二十九章）云々という程度の意識であり、義兄も「達者で張物でも洗濯でもする」（二十六章）とはいえもう八十歳の祖母を「見送るまで」の間のことと解している（二十九章）。

たしかに、限られた期間の、相対的な悪条件であっても、何程かの、又は何らかの△断念▽には違いない。しかし逆にいえば、少なくともこの一件のみによっては、「あきらめ」という題名（どう訳るにしろ）に最も適切な——考えうる最も絶望的な△断念▽情況は構成されてい得ない、ということである。

II

前出、現行唯一の選集として先年刊行されたオリジン版『作品集』の第一巻解題（長谷川啓氏）で、「あきらめ」の刊本文と大阪朝日初出本文との著しい相違が指摘された。

とくに同解題が注意を促しているのは、女主人公富枝の女子大での友人で「僅か半学期ばかりで、退学」したが「矢張り天才肌で」（一章）「よく女優になると云つてゐた」（五章）、富枝より「二歳上の二十四」（初出三十七回、刊本で削除）の三輪初女はつめに関わる部分の、改変（おおむね初出稿の削除又は圧縮）である。その中、改変の度が最も甚だしい刊本十三章相当個所での「作品のイメージ変更にかかわる重要な削除分」の性格を、右解題は、

三輪の自立意識の強烈さ、女性差別の現実を踏まえた男性観、嫌悪すべきものをも見据えるという複眼の発想を持ったたかな芸術観が散見されるとともに、富枝自身の切実な自立志向と三輪への憧憬や敬慕の情が強く滲み出ている部分である。彼女たちの女優としてあるい

は作家としての夢と抱負が語られ、もっとも直截に上昇志向のうかがえる箇所でもある（略）

と要約する。具体的な作品本文でいうと、

(1) 止宿先の義兄宅での不快（義兄の多情と姉の嫉妬）を訴え自活の願望を洩らす富枝に向かって、三輪が自分の家に移って来るよう勧める件。

（初出三十五回）

(2) 「男には正面を切つて馬鹿にしてや」り「翻弄」すればいい、と言いつ切る三輪と、「妾には翻弄は出来ない」と答える「弱くつて駄目」な富枝の、対照。

（三十六回）

(3) 三輪の劇壇活動、富枝の文壇活動への、それぞれの抱負。

（三十七回）

(4) 「芸術の為には」私生活上の不快（例えば義兄の女性関係）をも熟視して自分の成長の資にすべきだ、と説く三輪と、「其様惨い事は自分には出来ない。其様苦痛を忍んでまで、芸術の為に捧げるのは嫌だ」と「一口に却けて了ふ」富枝の「弱」さの、対比。

（四十回）

が削除され、「引きかえに、二人の気持の齟齬が強調されたような加筆がなされている」（解題）。こうして、多量の文章を削除し、分量的にはずっと僅かを添加した形の改訂の意図を、解題は

富枝が、自己の「性」すら逆手にとつてのし上ろうとする三輪に違和感を抱きつつ、作家としての自立を一時思いとどまるという「あきらめ」の主題に絞つたためかも知れぬ（略）

と推測するのだが、これはやや先入見に捉われた観がなくもない。△作家としての……思いとどまる▽ことが「あきらめ」の主題とも即断できないが、その△……思いとどまり▽自体も、右の改訂でそれほど納得しやすくなっているとは思えないのである。

たしかに三輪の自立意識その他は女が世に出て行くのに相当有効な（一つの）態度には違いなく、従つて、それに対する富枝の違和感の強調は、

その有効性による成功の断念に向かわせることを、想像させよう。しかし反面、初出稿でのそうした三輪の考え方の具体的で詳しい開陳を削除して、新たな

三輪は昔富枝を一人の話相手にして劇界へ立つての抱負を語ったり、自分の感情を富枝の前には露にしたやうにして今の富枝には対さなかつた。何所か自分は自分の思ふ道を行くと云つた様に深い話もなくなつて其の場なりに済ましてゐるのが富枝には飽き足りなかつた。

と、二人は何もお互の胸に触れるところもなくつて別れた。

(共に刊本十三章)

という要約だけによって示された違和感では、その違和感自体も、又、その結果としての或る種の成功の断念も、共に実感や実体性が稀薄になつてはいないか。結局、△作家としての自立を一時思いとどまる▽ことと理解納得は相殺されないか。

また、先程、有効な△一つの▽態度、と留保を付したように、富枝はげんに(既に)三輪の考え方を詳細に聞く以前に於て(当然その考え方に従つてなどはない俚)脚本が当選し、劇場で上演されるという段階までの成功は、見ている。そして今後も作家である義兄や義兄の交際仲間からの便宜は何かと得られよう(げんに富枝が女子大を退学して作家修業に専念する決心をした時、義兄は「十分僕が援助して上げる」と言い、客も「取次大販売が兄さんの手にあるから」と同じている(九回、削除))。とくに三輪の説くような態度を積極的に示さずとも、かりに示した場合ほどの成功は困難でも全く作家への道を閉ざされるということにはなるまい。つまり、三輪への違和感(三輪のような姿勢の不採扱)ということが、△作家として……思いとどま▽らしめるべく、それほど決定的な要因となるとは考え難いのである。

そうした事情を象徴するかとも思える、富枝と三輪の二人の顔立ちを対

比した描写が初出本文にはあって(刊本削除)、

富枝の濃い男性的な眉毛と、三輪の淡く長い下り尻の眉毛とが、相対して互の性格を語つてゐる様だ。(三十二回)

とするのだが、これが二人の名前の入れ違いでない限り(勿論みだりに入れ違いなど想定できない)、三輪の外面如菩薩的なたかさは今措き、富枝がそれを却けたのはかりに△弱さ▽とよぶとしても単純な弱さではなくて、風にしなうことを潔しとしない喬木の△男の△弱さ▽的なものとされてゐるのではないか。無論△男▽は敗北しないなどということはないが、性を武器とし生活を犠牲とするといった△邪道▽を拒んだがゆえに最早敗退するしかないのだ、といった、拗ねひがんだ筋道の敗北意識は、△男性的な眉毛▽に象徴される△性格▽の富枝には似合わない——と作者は考え、描いてゐるのではないか。そしていうまでもなく、主題の△あきらめ▽というのは富枝の意識の問題である。

もしこれが考え過ぎなら顔立ちの対比の挿入は全く無意味であり、無意味な描写がいかににも意味ありげに挿入されているのは読者を惑わす点で積極的に過失とせねばなるまい。そして勿論、そこまで作者を譏るのは多分読者の側の、自分の読みへの過信という思い上がりにも属そう。

『作品集』解題によって光をあてられた初出本文が示唆する△△あきらめ▽という主題▽理解の鍵は、別のところに見出だされるように思う。解題でも言及はしたがあっさりとして過ぎされた、△三輪への憧憬や敬慕の情▽が、その糸口となる。

これは解題が云うように、刊本での△三輪の考え方への違和感▽への絞り込みとは対照的な、初出稿での△富枝の自立志向▽三輪への、或る点での共感▽と、重なり合う、又は一続きの心情とも見える。しかし、そういう部分もあるが、そうした境域からはみ出して、三輪の考え方や才能ではなく容貌肢体の魅力に向けられた官能的な憧憬思慕も、初出稿には豊富であり、かつ、三輪の側のそれに応える気持の動きも、刊本よりは目立つ。

そうした内容の、刊本で削除又は圧縮された主だった箇所を示すと次のようになる。

(1) (富枝の脚本の当選祝いに義兄達と会食に出かける(刊本三章)途中、市街電車の中で三輪らしい女を見かけた(この件刊本で削除)後に)

三輪と聞いてから、(富枝は)心が鬱ぐ程その人に逢ひ度くなってくる。今のが実際その人なら、兄さんがるやうが姉さんがるやうが、妾を見て知らぬ顔をしてふさがない。然し、斯うして事実電車の中でなど偶然出逢つたら何様に嬉しからう。益らぬ姉さんの嫉妬から、貴女が姉さんの手許を離れるまで決して貴女にも逢はぬ。と云つて別れて了つた限り、移転つた先きさへ知らして寄越して呉れないけれ共、何処に何をしてゐるのか。女優になるの、絵師になるの、と云つたが、(略)と、富枝は頬に恋ひしくなってくる。

(初出八回、刊本で削除)

(2) (義兄の客達の談笑を聞きながら(六章))

(反対に、富枝の心の状態が今静かになつてゐる。)そして其の連中の間へ自分の身体を交へ度くないと思ふ程超然とする。／花沢や半田を愚物視するので斯う思ふのではない。喧燥いでゐる其の不真面目な態度が富枝の現在の落着いた……愁ひを含んだ様な精神と合致しないからだけの事で一同を厭ふのだ。／恋人を思ふが如くに富枝は友の三輪に憧憬れ切つてゐる。

(十八回)

← (改変)

夕暮れを吹く秋の風のやうに何か淋しいものが富枝の心の底を揺ぶつては過ぎた。富枝は揺ぶられる俣にその淋しいものに親しまうとしてちつと机によつてゐた。

(3) (演芸館での妹の温習会の折、思いがけず三輪と出会つた(七章)後)

(逢ひたいと思つてゐる人に逢へたと云ふ嬉しさが、初めて徐に胸の底へ湧き出してくる。)其の人の前では一言の言葉さへ洩らし得なかつたものが、行つて了つた後になつてそわ／＼した態度になつてくる。欲する物を得たと云ふ様子、非常な満足の喜びが其の面に浮んでくる。

(二十回、削除)

(4) (出先で会つた三輪に当選脚本の感想を聞きながら(十二章))

富枝は三輪の許へ来たやうな気がしてゐる。心が静になつて、今朝からの不快が一時に晴れる。

(三十二回、削除)

(5) (三輪の家に連れられて行き、風呂に誘われて(十三章))

窮屈さうに流しへ蹲踞んだ富枝を見て、／「随分痩せてゐるのねえ。」と三輪は驚いてゐる。／「千早さんが、荻生野さんは虚弱さうだと云つてたけれど、全く健康な身体附きぢやありませんね。」と云つて、その富枝の羞を帯びた風情を床しく眺める。(三十八回、削除)

(6) (外人女優の写真を見てその妖艶さを語りながら(十三章))

然う云つて語る三輪も実に艶麗だと富枝は恍惚してゐる。(略)其の頸筋、顔、腕、人間の皮膚の色ぢやない。と富枝は見えてゐる。宝玉類が自然の産を待つより他はないのと同じに、人の智恵や手の先で粧つたぐらゐで、こんな真の美は求められるものぢやないけれども。

(三十九回)

←

さうして(三輪は)何かに憧れてゐるやうな捉へたいものがあつてそれを追ふやうな眼をしてぢつと考へてゐた。(略)富枝はその美しい顔を、自分一人唯かうして無意味に眺めてゐるのが惜しいと思つた。其れを三輪に云ふと三輪は富枝の顔を見て一寸笑つた。

(7) (富枝の姉の嫉妬への危惧を語る三輪(この件刊本では削除、十三章相当箇所)に対して)

「姉の為に貴女と疎遠になるなら、妾は姉を捨てるわ。姉妹としての

姉より、友人としての貴女が妾には大切ですよ。」／「まあ、姉妹は姉妹ですよ。」／然し、心の中では富枝の言葉を嬉しく思つてゐる。

(三十九回、削除)

(8) (三輪の家に泊まった翌日の夕方(刊本十三章では訪れたその日の夕方?)、富枝が帰る時)

三輪は途中まで送つて行つて、途々富枝が兄の手を離れて自活して行きたいと云つた事に就いて、其れは貴女の身に取つて却て不利かも知れないと云つた。(略)「貴女思想一つで、家へ来てゐる事は決して不可ないと云ひませぬよ。明日にも来ても構はないから能くお考へなさい。生活の事(三輪の家の食客になること)なんぞは問題にする要はないんですよ。」／と云つて浅草橋の停留場で別れた。／富枝は三輪の云つたそんな言葉を、繰返し繰返してゐる。さうして、三輪が懐愛しくて仕方がなかつた。云はれた俥に今日も一日三輪の宅に宿ればよかつたと、今更後悔される。

(四十回)

二人は何もお互の胸に触れるところもなくつて別れた。それでも帰る時三輪は電車の停留場まで送つて来た。富枝は自分と一所にゐた間の三輪が始終興のない顔をしてゐたといふ感じだけを残して麻布へ帰つた。

(9) (当選脚本を上演する劇団の座付き作者の訪問を受けた後(十四章))

富枝は心で、三輪さんが小満名(当選脚本の女主人公の名)を演つて呉れたら、作物は何様に譏されやうと構はないと考へてゐた。何となく、その日も富枝は三輪が懐愛しくて仕方がなかつた。其所で三輪へ手紙を書く。／大和座で「塵泥」を演ること、田里(人気役者の名)が小満名を演ること、貴女が演つてくれる様な場合があつたら何様に嬉しいだらう。貴女が小満名を演つて名声一時に上がった、と云ふ様

な事だつたら、自分の生命は祈つたものへ捧げてしまい、(略)自分の作は貴女に由つて活き、貴女は自分の作に由つてその天才を發揮することが出来るやうになつたら、実に理想だ。と書いて見る。／其れを懐にして(外へ出る。)

(四十二回、削除)

初出稿での三輪への親愛思慕の一般的な濃厚さは以上に見る通りだが、さらに付け加えれば、

(一) いわば何かのほずみという感じで、随時、継ぎ穂なく三輪に想いを馳せている。例えば、(9)の空想は三輪の「サフオーだの、ザゝだの、この女主人公の小満名だのを演つて見たいやうな気がしますよ」という言葉(三十三回、十二章では削除)を踏まえてはいようが、現実にはそんな企画など話にも出てはいない。また、(2)にしても、その前に妹の養家で日舞の相弟子の△三輪という女▽の噂を聞いて帰つて、「自分の逢ひ度いと思つてゐる三輪さんだつたら何うしやう。(略)何と云つて逢はうか。」(十七回)心ここに無いのだが、しかしその後、

(2) 引用部分の直前では同性愛の妹役で文部次官令嬢の染子(「高等女学の方の五年」、富枝は大学部の三年^(註2))から無音を怨ずる手紙が来ていて、読み終つた時富枝は「思はず嬌然と」し「一寸手紙に接吻すると、急いで」返事を書いてゐる。それが忽ち一転して、再び「三輪に憧憬れ」る想いに浸っているわけである。

(一) 前項の裏返しというか、右、染子への対応の直前ぎりぎりまで、三輪に心を向けている。例えば、右引用部分だけでは判らないが、(9)末尾の「……外へ出」たのはその足で田端の別邸に静養中の染子を見舞う(十四章)ためなのであって、その懐に三輪への手紙があるという繋がり(悪さは、染子の見舞が義務的に考えられているかに思える。また、これも前の引用部分外になるが、三輪が新聞に醜聞を書かれたのを利用して相手の男から金を出させて洋行するらしいことを知った後、「染子の許へ行く積りで電車に乗つただけけれども、染子の家に着く

まで染子の事を思はなかつた」。そして相手の家に着き「寂莫した家の内に染子の呼吸を考へた時、急にその人が懐愛しくなつて来」る（四十八回、これは刊本十六章でも同様）のである。

作品集解題で、改訂の結果「同性愛の官能的な側面がより鮮明に押し出されることになつた」とする、その同性愛とは、当然、右初出本文では三輪と比べて劣勢だったが改訂による三輪の退潮で相対的に目立つことになつた、染子との仲をさす。だが、初出本文での染子の劣勢は改訂前の三輪への傾倒の強さのせいだけではなく、染子自身に付加されていた悪条件にも困っていたらう。

刊本でもしばしば本宅を離れて静養し入院もしている「染子の病氣（呼吸器病）が、初出紙では『脳神経衰弱』と二度もはっきり書かれてはいるのに、初刊単行本では削除されている」と解題が指摘する通り、

染子は病氣に罹つてゐる。脳神経衰弱と云ふのだ。勉強は堅く医師から止められてゐる。一日でも富枝の姿を見ないと夜も眠らずに泣いて恋ひしがつてゐる。其れも病氣の故だと医師が云ふ。（四十三回）

（入院先の病院に見舞に行つた折、病名を忘れたと云う付添いの老女に、富枝が）脳神経衰弱ではないかと聞くと、その通りの名だと答へる。（六十二回）

とある他、富枝との対応の中でも

（富枝をたずねて来た染子の口説が）例の乱れた調子になつて来たのを、兄などに見せ度ないと心の中で煩つてゐる。（二十二回）

「まあ、お姉様まで妾を狂人に視ていらつしやる。酷うございますわ。」／「だつて、少し可笑しいぢやありませんか。（略）ですから妄想狂に罹つてゐるんですよ。」（四十三回）

病氣の故で蒼くなつてゐる染子の顔は、暮色の中に猶蒼ずんでゐる。眼が磨ぎすました刃物のやうな光を含つ。

（四十四回、これは刊本十四章にもほぼ同趣の文あり）

（略）阿女様も阿父様もお兄様も、誰れも彼れも厭でく／仕方ないんですもの。毎日斯うやつてお姉様が入来しつてさへ下されば（略）／「其れが病氣なのね。」／「病氣で恋しいんでせうか。」（四十四回）

といった工合に、反映したり、直接話題にされたりしている。但し、刊本で

富枝は帰り際に送つてくれた看護婦に染子の病名を尋ねると、看護婦は呼吸器病だと答へた。（二十二章）

という所は初出六十三回末尾にも既にそのままの形で存し、看護婦がとりつくろつたものと見るべきか、それとも以前からの神経症はそのままに呼吸器病を併発してその為の入院（それなら刊本も全面的改変というわけではない）か。後段で、大磯の転地先から富枝を迎えに上京した染子が過激な運動のため発熱し安静を命じられる（七十七回）のは、神経症よりは呼吸器病の方がふさわしからう。

ともあれ、甚だ常識的な云い方だが、それと知る以前に（四十二回冒頭ではまだ富枝に「一種の精神病なのかも知れない」と推測させている）既によほど情愛が深まっていたのでもない限りは、神経系の病人という事情は親愛の障害となつて当然だらう。作中の早い段階での富枝は、染子に対して

小雨の降る中を帰つて行つたが、今夜も恋しいと自分を思つて、寝られないと云ふのだらうか。と唯哀れにく／なつてくる。晩に床へ就くまでの時間に間に合せて、手紙を送つて喜ばしてやらう、と（略）紫姫へ。と書き出して、自分は今夜紫色の夢を見度いと思ふ。（略）と書いた。

（姉にからかわれて）もう少し、紫の色の影を有形しておきたかつたと富枝は口惜しい氣がする。

（染子への手紙を届けに）泥濘を踏む車夫の足音を現なく聞いて、紫

の人の思ひは此所に通つてのだらう、と富枝は（染子が持つて来た）薔薇の匂ひをなつかしむ。（以上二十三回、刊本八章もほぼ同文）
 という程度の感情はあったが、しかし同時に

（染子の母親が）妹と思つてやつてくれと頼む。然し富枝は貴枝（養女に行つた実妹）を可愛がつた心持で染子を可愛がるやうには自身も思はれなかつた。染子が恋ひしがつて泣かない様になつたら自分も染子の許へは来ない様になるだらうと思つてゐる。（四十三回、刊本削除）
 という限界、根本に於ける受動的な姿勢もまた確認されていた。

前述三輪関係の叙述程ではないが染子関係の叙述も部分的には削除・改変が甚だしく、その結果叙述の総量も減つていて、例えば刊本八章での染子の来訪の場面は初出二十一〜三回より約三割減、十四章の富枝が田端に見舞に行つた折の前半部は四十三、四回より約三分の一減となつてゐる。しかしこの、逆に云つて初出本文の長さというのは、主に富枝と染子の情合のくいちがいから、ひたすら愛を求める染子と相手の健康や自分の方の事情を説いて諭す富枝との押し問答が長引くことによるので、刊本に比べて二人の間柄の深さ濃さよりは難渋感の方が目立つ。

ところが、こうした染子自身の悪条件も関わつていよう、対・三輪一劣勢は、初出形に於ても作品の後半で（つまり刊本での改変を待つことなく）変化する。

その原因の一つと考えられるのは、田端の別邸に染子を見舞つた日、二人連れ立って夕暮の田圃、木立、板葺屋根や工場の煙筒やを眺め渡した時、ふと富枝の心を蔽つた寂寥感である。

（富枝はまだ見た事のない故郷の地がふつと思はれる。そしてまだ逢つたことのない祖母を思ひ浮べた。）／嘗て上野の絵画展覧会で見た『孤児』と云ふの、孫を抱いて夕暮の縁側にちよこんと坐つて眼を上にしてゐた、腮の突き出た頬の落ちた白髪のばらついた、袖無し半纏を着て背を屈めたお婆あさんが臙に描かれる。自分の祖母は其の通

りのお婆あさんの様な気がしてならない。／（自分が養はなければならぬお祖母さんだと思ふと、其れをこの頃の気候にも葉書一片消息せずにある事が甚く不孝に感じられて富枝は継母の上も思つた。）／「染子さん。紫っぽい着物をお着なさいな。思ひツ切り華麗な風をして見せて頂戴。」／染子はうなづいてゐる。そして羞しさうにして、「今晚は宿つて下さるのね。」／と幽に云つた。

（四十四回、（）内は刊本ほぼ同文、他は削除）
 眼前の光景に触発された、自分の逃れ難い（逃れてはならない）運命の、そうはいつても否定し切れぬ寂しさが、こうした場合人を屢々酒に或いは異性に溺れさせるように、富枝をして目の前の染子に溺れさせたわけであろう。そして、次の四十五回は、

染子と富枝の間のレスビアンラブの描写は、思いきつて大胆であり、わが国の文学に、女の同性愛がこれほど真正面からとりあげられたのは、はじめてであつた。

とする瀬戸内著が「有名な花袋の『蒲団』の一節などより、はるかになまなましい官能の匂いをこめてゐる」と評する、「富枝が（略）染子といつしよに寝た翌朝の描写」だが、

お姉様がお好きだからと云つて、染子はおはま（下女）の止めるのも聞かずに、昨夜江戸紫の二枚衾を着て寝た。長い裾を足に絡まして、白い敷布の上に下白を乱して寝てゐた姿を夜中にふと眼を覚まして眺めた時の感じを、今富枝は縁に立つて奇異な夢のやうに繰返した。

（十五章）
 という書き出しの前に、初出では

富枝は柱に凭れて寝起の顔を恍惚とさせてゐる。
 という一行がある。これは、この章後段の

染子の眼は、もう恋を知つた眼の様に、情の動く俣に閃いてゐた。
 （略）染子は自分を恋し、その恋が遂げられた様な感じで今朝を過ご

してゐるのだらうかと富枝は再び昨夜の不思議なことをしみくくと考へてゐた。

といった染子の側の揺曳に、富枝の側からも対応するもので、その一行を削除した刊本形は官能性に於て初出形よりむしろ穏やかになってしまつてゐると謂えるのではないか。

ちなみに、先行二十二回での回想に、暑中休暇にも病む染子に呼ばれて大磯の別邸に行き「其の晩は染子と同じ床の中に、沙翁のテンペストの話を為た」とあるから、「長い裾を足に絡まして……寝てゐた姿」云々がただ物理的に一つ床で寝たということなら今さら大仰すぎ、だいいち、寝相に氣をつけてやらねばならない幼児に添寝したわけではない。染子を「自分の思ひの俣にした」という具体行為的表現（自分のものになった、などとは違ふ）もあり、単なる同床ではなかつた（夏には染子の母親も在邸、今回は染子一人で静養中という条件差がある）ゆえの、いわゆる後朝の想いと解するのが妥当であろう。昨夜の「不思議なこと」というのも、また引用部分外で染子の陶醉したような表情から雨月物語「青頭巾」の話を「思ひ出してる」たというのも、そう解さないと通じまい。

さて、初出形ではさらに右冒頭の一行と呼応するように、

「一生御一所にゐたい。」／染子は急に斯う云つて富枝を見上げる。

（眼の瞼に残つた薄い白粉が可憐らしく見える。息が機んでゐるのか、

赤い唇を半開けてゐる。）／「貴女さへ変らなければ……。」／「え。

きつと。お姉様。」／強く握つた富枝の手を、感覚の失くなるほど染

子も力を入れて握つてゐた。

（ ）内のみ刊本はぼ同文、その前後は削除）

という対応もこの回の後半にあつて、富枝はまことにあっさりとして、前日も「そんなに恋ひしがつても生涯一所にゐられる訳ぢやなし」「お互ひの事情が許さなきや仕様がないでせう」と説いていた（四十三回）日頃の立場を抛つてしまつたかのようなのである。

二人の現実の身辺事情が変わつたわけではないのだから、思はず雰囲氣に流され感情に溺れたといったことなのだろうが、この回を境にして、以後はこれまでのような富枝に実が有る無いの押し問答は姿を消す。直接の原因は△恋が遂げられた▽染子が病的な哀訴をしなくなったからだが、富枝の方も寛容さを増したといえそうで、例えば大磯に静養に行つていた染子が宵に入つてから突然迎えに現れた時も、格別その非常識を咎め立てもせず、夜の大磯へ送つて行つてやる（七十五、六回）。

こうした初出形後半での染子への傾斜の、もう一つの原因として考えられるのは、同じ四十五回で萌している三輪への△人格的▽失望である。

染子とのきぬぎぬの描写の間に挿入された、「朝昔一座の新女優」三輪を実業界の大物「千早阿一郎氏の寵妾」と紹介した新聞記事を見て、富枝は「偽りの記事だと思」い三輪に「同情」（刊本同）するが、その一方で「又或ひは三輪さんの人格が芸人的に卑しくなつてしまつたのではないかと考へる」（刊本削除）。これまでの三輪への感情からみても前半の△同情▽は当然かつ自然だろうが、後の疑惑の根拠はというと、新聞の「三輪の写眞版」が「その記事を自慢らしく公衆に示してゐるかの様に、少し笑んでる」（刊本同）ことくらいしか、見当たらない。義兄達、男の間ではさきに三輪の「男に脆い」「履歴」が話題にされて（三十一回）、読者は知っているが、富枝は聞いていないのだから、この疑念は少々軽率にも見える。しかしその直後に、これは富枝の目の前で、

「（御馳走になるよりも）お話を伺つた方が結構で御座います。劇か

文芸趣味のお話でも。」／富枝は三輪の其の言葉を聞いて、何となく

三輪が芸人的になつた様に感じた。（三十二回、削除）

ともあつて、唐突感はこのも同じだが、不信の兆はかねて断片的には見えていたともいえようか。更に云えば、以前に別れたきりの三輪を電車内で見かける、篇中では三輪の初登場の場面の身なりが、「（三輪さんなら）彼様風なんぞ為てるもんですか」と富枝が言う（八回、削除）ような、

地色は白く、羽二重に浴衣柄を置かせた品のやうに見える。帯は白く、ぼく艶をもつてゐたやうだ。引詰めた銀杏返しに結つてゐる。

(七回、削除)

と描かれているのも、遠く早い暗示だったとも考えられなくはなからう。その後三輪の母親から千早に費用を出して貰って洋行するらしいと聞かされ、「富枝は疎ましく思」い、「三輪とは遠く離れて了つたやうな気が」する(四十七、八回)。「塵泥」観劇の折に三輪も見に来てると人から聞くが会えず(六十六回)、のちに、千早と同伴だったと聞かされる(六十七回)。そしてその後はもう会うこともないまま、三輪との間は連載の最終回(八十回) 末尾で

(富枝が岐阜に発つ) その朝三輪から十二月の幾日とかに日本を去ると云ふ葉書の知らせがあつた。わざ／＼知らしてよこした書状は一枚の端書であつた。それが月次らしく富枝には感じられた。

と素然と消滅(以上、刊本同)する。このように増殖して行つた、三輪への、性格的△強・弱△格差感などは別のいわゆる人間的疎隔感が、富枝をもう一人の方に傾かせたということは、倫理的な是非はともかく、想像に難くはなからう。

話が前後したが、後半で高まった染子との間も、右、三輪との終焉の二回前に事実上の終りを迎える。

富枝を迎えにわざわざ上京して大磯へ連れ帰つた染子が、三日めの朝「泣寝入りをした様にその眼が腫れぼつた」く(七十八回)、ただ悄然と涙がちなのはよく判らない。富枝がこの日帰京する「積りで、その用意をしてゐる所へ」起きて来た時、既に泣き寝入りした風だったのだから、別れを悲しんでというのは時間的順序が微妙に合わない(積りというのだから、前夜既に告げてしまつてあつた事ではあるまい)。母親の留守を見計らつて大磯の邸を忍び出、やっと迎えて来たのに、翌日の夕方には早くも母親が帰邸して心ゆく逢瀬とならなかつた悲しさといつても、それなら尚更、

これまでの例からして富枝に再訪の約束をせがみそうなものを、その一言も言わずに唯涙に暮れているというのは奇妙なのである。

もっとも、富枝の側の終焉感、理解できる。

昨夜染子の母親が、富枝に対する娘の異常な思慕を「何の為にこれ程にして」と「今までになく」「注意の眼が底光つた」のは、「不快」には違ひなくともそれはそれだけのことだろう。だがその一方、「それでも夫人は親しんで」、染子に独逸滞在中の許嫁があり、来年(今は十二月^(註3)) 帰朝したら「直ぐ結婚させる積りだ」と語つた。

そんなことくらい、と云つてはなるまい。富枝は父を失つて小説家の義兄のかかり人だし、三輪も母一人子一人でつい先頃まで看板描きが生業だつたらしい、いわば軽い身の上なのと違つて、高級官僚令嬢である染子にとつて親の定めた婚約の重さは絶対的であり、女同志の非常識な親交など、その前には微塵に吹き飛ぶべきものである(いま、明治末のはなしをしていゝ)。許嫁(一夫)という、同性の愛と対決する相手が現実の存在として現れていない中は何となく済まされても、現実の存在として示された以上、すべては終わった、少なくとも終ることが確定したのではないか。

だから、染子との間柄の消滅(の見通し)については、染子自身には三輪ほどにも「罪」はない。染子も又、被害者である。しかも、母親が許嫁のことを打ち明けた時

「病氣があるので弱ります。」と夫人の調子は沈んでゐた。

ように、予定された正常な結婚⇨良家の主婦への道には支障⇨挫折も考えられなくはない。そして一旦その道が明瞭に意識され具体的に計画された後の挫折⇨脱落は、無意識・未計画の老嬢とは異なり、明確な疵物⇨敗退者である。すでに許嫁を持たされた染子の身は、このまま事なく連んでも、また障られても、いずれにせよただ華やかにのどかな△娘△の生活には留まり得ず戻り得ないのである。

先程、富枝が帰る朝の染子の愁嘆の度を不審にしたが、前の田端訪問

(まだ秋の季節)の折には富枝を慕うあまりに

「ですから阿母様(染子の)の仰有る通り、妾の傍にゐらして下さつて種々御勉強を成すつて下されば宜しいんだわ。どんな御都合でもお計らひすると阿母様も仰有つていらつしやるのに……」

(四十三回)

「ですから阿母様がお姉様に、お家の御都合で田端の方へでも赤坂の方へでも妾と一所にいらつしやる事はお出来にならないかつて聞いてらつしやるぢや御座いませんか。」

(四十四回)

と、夢のような(姉妹同居)を提案さえしていたのが、今回はふつりと(明日)を言わないのは、或いは染子も又、ごく最近に許嫁のこと(少なくてその確定)を告げられたのかとも勘ぐられる。

ともあれ、その朝は富枝の帰る時になつても、染子は富枝の寝んだ座敷で富枝の畳んだ夜着に寄りかかつて泣いていて、見送りにも出て来ない。富枝を乗せた人力車は

邸宅を廻つて松原の横を走つた。別邸内の畑が見えた。自分の寝んだ座敷の窓が白く見えてゐた。人力車の幌は忽ちにそれをかくして唯行く手の広い人道が見ゆるばかりであつた。／東京も雨の日であつた。富枝は人力車で麻布へ帰つた。

(七十九回)

抑制の利いた表現だが、感情の深まりはかつて三輪に対してのそれと軽々に比較し難いものを伝えようか。帰宅して、義兄夫婦との応対を百字ほど挿み、

富枝の気は鬱してゐた。お伊予(継母)の顔を見ると明日にも岐阜へ行かうと云つた。

(同)

と続け(岐阜行き)の問題を最終的に決着させた、最直接の動機は、かくて議論の余地はない)、又八十字程家族の動きを写した後、

富枝は染子へ手紙を書いた。／自分は当分岐阜へ祖母の看護にゆく。東京と大磯でさへ逢ひがたいのに今度は長い間お目にかゝる折もある

まい。精々附いてる人の云ふ事をよく聞いて、病気を早く癒し安心をさせなければあなたは種々の人に濟まない事になる。自分は貴女に離れてゐても貴女の健康を思ふほかには何もない。と云ふ様な意味であつた。書いて了ふと涙が封筒の上に落ちた。／富枝は又、学校時代から染子のよこした手紙を全部纏めた。紫、白、青、いろ／＼の紙箋の上に、恋しいと云ふ字が一封毎にいろ／＼の形の字で現れてゐた。富枝は少時それを読んでゐた。／纏めた手紙を小さい寄木細工の箱に収めて、それに鍵をかけた、その箱の上に今の手紙を乗せて富枝は長い間思ひに耽つてゐた。

(同)

蛇足かとは思ふが、富枝の涙が描かれたのは此処と、他には義兄夫婦のあさましい痴話喧嘩に接した時(十一章)、染子の邸に泊まったのを嫉妬に狂つた姉に誤解され墮落と罵られた時(四十七回、十六章では削除)だが、後の二つとは涙の性質が違う。また、この涙は染子(との仲)に対してだけではなくて、そのようにして離京する我が身の上にも注がれていよう、とはいえるが、それも云い換えれば、後者の感慨の象徴乃至それを触発するものたり得たのは結局他の何物でもなく、染子(との仲)であつた、ということでもある。

そしていよいよ離京の当日(前引、三輪からの離日の挨拶状の件の後に続けて)、

(新橋の停車場で泣いて立つた姉の姿を富枝は眺めた。)そして、この汽車が大磯を通過することを思つてゐるうちに汽車は出た。

というのが、連載全八十回の最後のセンチンスであつた。△あきらめ△という主題が、どのようなファクトに対する、どんな心情か、という、かなり複素的かつ不明瞭でもある問題の面前に、その主題が完結した(筈の)時点で富枝の心を領したものは、何はともあれ、染子の病む土地の傍だった、という、動かし得ない事実が存する。

III

もう一度整理かたがた確認すると、刊本の本文に於て、富枝の同性との愛は初出稿の多様・豊饒から、好く云えば絞り込まれ純化され、わるくいえば貧しくなっている。

刊本では殆どそのみになってる染子の可憐な思慕へのいとおしみと官能的陶酔とは、既に初出稿に於てもその後半に、むしろ初出形より濃厚な形で存在した。但しそこに到るまでの渋滞曲折も前半部に存して、刊本のように一色でない、というだけである。それに加えて、刊本ではそうした要素は余り目立たない三輪が、はっきりと、染子にとっての富枝に似た性質も併せ持っている。図式化して云えば、刊本では△妹▽染子しかないが、初出形では△妹▽染子以前に△姉▽三輪も存在した。即ち、二人の同性に対する二種類の愛があったのを一人（当然、一種類）に削減したのが、刊本文での富枝の同性愛なのである。

或る作品の本質究明には、初出稿或いは更に溯って草稿と、定稿乃至死の直前までの加筆稿と、いずれが適切かは勿論一概にいえない。しかしそこまで突き詰めた話でなくて、四十四年春三ヶ月の大坂朝日の読者がともかくも懐いた筈のイメエジについて云うなら、同一女主人公の同性への愛が△姉▽と△妹▽との立場を入れ替えて二件も存する、二回も起こるという作品構成が、その同性間交渉の内容は措いて数だけのことにしても、読者に何も感じさせず、いかなる意味も示唆しなかったとは考え難い。例えば作家への道への不適応―挫折感（？）といったものの、質はさきに検討したが、量はともかく数で見ると、三輪のような生き方が出来ないという一件であり、一回起的なものではない。それに比して同性愛の二件・二回という起こり方は、このモチーフの重さを、質に対してやや感受の鈍い読者にも、感知させたのではないか。

即ち、初出形「あきらめ」は——少なくとも初出形は——、当時一

校しかなく現実の学生数も前年四十三年度には僅か四九八名にすぎなかつた^(註4)（丁度女子高等教育の反動期だったからだ）とところの物珍しい△女子大▽生とか、女作者や女優の夢、高級官吏の家庭や劇壇・花柳界から一転して山深い里との絆等々、目先を変える工夫は色々あるものの、底流は女同志の情痴——の破綻——と映る可能性は、十分にあったのではないか。本稿の問題設定に合わせて云いかえれば、表題と内容がそのままに受け入れられる可能性、ということである。

しかしそうは云っても当時の時評にも、

中には（略）女と女との心の秘密と云ふべきものも際どく書いてある。とか、中でも人目を引きさうな染子との愛を名指しても、

富枝と恋ひ慕つた余りやつれ果てた染子の姿を描いて居る辺りは歌麿や豊国の筆で書かれた今様の美人画を見るやうな気がした。

（『早稲田文学』明44・9、「新書批評」）

女らしい微細な官能的の描写は誰やらも歌麿の美人絵を見るやうだといったが、それよりもつと油っこい。浮世絵を三色版にしたといつたら怒られるかも知れぬが、油絵に書き直した位の感じはある。

（『新日本』明44・11、「月次図書館」）

といった、異色ある部分といった位置付けでしか注目されなかったのは、「あきらめ」への論評が概ね初刊以後であって（昭和女子大刊・近代文学研究叢書『田村俊子』篇「資料年表」）、当然、刊本文に拠るものであろうことにも起因しているようか（右「年表」に見える「あきらめ」連載開始以後・初刊までのこの作者への論評類は、すべて「静岡の友」（明44・2）「美佐枝」（44・5）を取り上げてのものである）。

しかしそこで或いは疑念が生じようかとも思うのは、後年の少女小説（吉屋信子によってその△型▽が確立された、とされる）なら知らぬこと、成人向け、さらには一般大衆向けの新聞小説の女主人公が（つまり、

かなり一般大衆的であるべき人物が)それ程まで同性愛にのめり込んでいること、——それが、女主人公の哀傷鬱屈を醸成している「主題を支える最有力要因である(——と解する)」ということの、不似合い・場違い感である。とくにこの作者が本作の後は男女のもつれ合いの描写に特色を発揮して、大正四年発刊の新潮社人情話新集Vシリーズには女流として唯一人入り、しかも二点も刊行していること等から、男女間ならぬ同性の愛にここまでウェイトが置かれているというのはその人に合わない感じ、△そんな筈はない、何かの見誤り(見落し)?▽といった嘸下拒否反応が生じましょうか。

その不審に対して、例えば前出瀬戸内著には、

「灰色の午後」(佐多稲子、『群像』昭34・10(35・2))にもあった

ように、俊子じしん同性愛の傾向も持っていたようである。木場の材木商の美しい娘を、ある時期、俊子は困っていたなどという話も伝えられている。円地文子さんが俊子と芝居を観た時、いきなり手を握りしめられてびっくりしたということもある。

ともある。これらは(事実と仮定して)田村俊子が既に田村松魚、鈴木悦との結婚生活、及び窪川鶴次郎との交渉等の、全てではなくとも幾つかは経た後の時期のことと思われる(右の伝聞の中、「灰色……」の窪川鶴次郎・稲子夫妻との交渉以外は年月不明)が、その段階に於てなお、同性への愛が青臭くも色褪せても感じられていなかったことになるうか。

しかし作品の理解は、当の作品の中では無理ならせめて他の作品に拠ってなされるのが次善であろう。作中人物の同性への執着は、「あなたとさへ一所に居たら、世間を忘れた放縦な生活が出来るに違ひない」から「あなたと二人限りの生活を初めやうかとさへ思ってる」た、という、恋文(むろん同性の相手への)形式の「悪寒」(大1・10『文章世界』)や、女友達の「咽喉首あたりの肌を見てゐて、ふとその同性の肉に動かされたことがあった」という「憂鬱な匂ひ」(大2・10『中央公論』)にも、ある。

しかしここでは異性愛と同性愛とが並んで(ひきつづいて)描かれる「春の晩」(大3・6『新潮』)に注目したい。

この作品は約四十枚が八節に細分されていて、四節までが男との逢引の場面、五節以降は、二節に(つまり逢引の最中に)

繁雄(目の前の相手)に別れたら、京子のところへ行つて見やうと思つた。／京子と——思つたは、づみに、幾重の胸に放埒な恋が燃えるやうにきざした。

とある、その年下の同性を訪れる話になっている。幾重という女主人公は、既に一節で、目の前に一人の男を置きながら

(略)心に、十何年も前の初恋人の若い姿がふと色めいて懐かしく浮んだりした。思ひ合つたばかりで何うともならず別れてしまつたあの男の面影が、愁い深くその胸に滲みでてきたりした。もう一度、こんな春の宵に逢つて見たい男が幾人かあつた。幾重はそれを一人づゝ思出して、浮気っぽい春の香気を含んだ雨の感覚を、しつとりと味つてゐた。

又、三節でも、目の前の男に「二人つきりで、どこかを間借りして暮ませうか。」と言いながら、そんな一人の生活を「空想的に楽しいものと思つて」いるうちに、その空想の中の「相手の男がさつき(略)雨を見ながら思出したある中年の男になつてゐる」。つまり病的(であろう)な浮気性ということかも知れないが、次から次と別の異性を想い得るのと、異性への想いからごく自然かつ滑らかに同性への想いに移行し得るのとは、やはり別範疇のことであろう。前者は通常の浮気心の度が甚だしいだけ(極めて甚だしいにしろ)だが、後者はそのような個人差とは別の問題なのではないか。

それが「春の晩」の女主人公には自然に出来た(相手の京子も、それまで「いつも来る原さんと云ふ男のお友達」を家上げていたのを帰るにまかせ、幾重の相手をする)のは、異性の美(?)と同性の美(京子の八美

しさVを繰り返して云っている)、異性への耽溺と同性への耽溺とが、同レヴェルにあるわけだろう。もっとも、移行のスムーズさから、その間にギャップのない、つまり△同レヴェル、と云ったのだが、その範囲内では主人公にとっても相手の京子にとっても同性の方がより好ましい、という、優劣差が設定されていることも忘れてはならない(或いは別の折には同性から異性へと移行することもあるのかも知れないが、書いてないことを想像したら切りがない)。その点、例えば谷崎潤一郎の、同性愛というより性別不問の白痴的性愛小説「卍」(昭3・3・5・4『改造』)で、女主人公はともかくとして相手役の徳光光子が婚約者から女主人公へ、更に女主人公夫婦との関係へ、と、殆ど無動機かつ無抵抗に流動し拡大する類の共存性とは異なるのである。

田村俊子が事実私生活に於てバイセクシュアルだったかどうか、また二種の性愛の優劣如何はさておき、作者としてそういう女性を想い描き得、女性の同性愛をそういう位相に把え得たという事実は、「あきらめ」の理解にとって重要であろう。

「あきらめ」のヒロインは義兄夫婦と同居という環境のせいも、また性質もあろうが、義兄の許に出入りする新聞記者や脚本当選で交渉を生じた劇壇関係者等、向こうは「甚く」富枝に「敬服して」(三十一回、削除)という千早文学士(前出三輪の金主の息)や、富枝を「自分のもの、やうにして」る(三十六回、同)新聞記者の半田も含めて、異性に心引かれる経験を、まだ持たない。その点、この年齢としてはおくてと云ってしまってもよからうが、しかし富枝という人間は発育不十分でも、その富枝がとらわれている性愛の一種類の方は、前述の事情からみて、この作者の作品中に於ては所謂児女の情として描かれてはいないものと、考えてよいのではないか(年齢的には少女と云い難く情緒的には女と做し難いこの中途半端さ——ゆえの魅力——を、十余年後の術語を先取りして△令女小説Vと称んでみたい、と云ったら、好みに偏し過ぎようか?)。

そこで次に、それはそれとして世間普通の事とはやはり云い難からう同性愛というモチーフの、極めて尋常平凡な新聞小説読者層へのなじみの点だが、既に八年前、掲載紙は異なるが小杉天外の「魔風恋風」(明36・2・9読売新聞)の副旋律として、帝国女子学院生の萩原初野と夏本芳江(校名は「……学院」だが本文中に東洋屈指の「大学校」とあり、初野は「此の六月」卒業予定の十九歳、芳江は「来年」卒業らしい)の二人の、「義姉様」と呼ばれ「姉妹の誓をし」た「義姉妹」として「親身の同胞の様に思」い、

学校に出ても互に顔を合はせるのを棄とし、帰る時も連立って同じ道を帰り、それでも飽き足らず、休日には必ず一緒に遊び暮す(略)

といった交情が描かれ、又それとは別に、同じ学院の女教師で、生徒の中から

対人は更るが、始終美しいのを一人手懐けて置いて、一緒に散歩したり、一緒に弁当を遣つたり、それから迷惑がるのを無理に接吻したり、それから、冗談か知れぬが……色々な事を云ふこともある。

という女性(初野にも「出来るだけ有情くして、始終」「機嫌を取る様にして居る」)も登場する。

新聞小説より更に普遍的な世上の風説としても、「明治三十五年頃、目に初めて女子大学校が開校せらるるや、天下の耳目はたちまち女学生に集注するに至った」が

彼らの中に同性の恋おめごっこというものさえも始まった。驚堂流の文字で絵葉書を遣つたり取つたりすることが、彼らの学課外の学課となった。

(生方敏郎『明治大正見聞史』。初版大15・11春秋社刊、引用は中公文庫版による)

と、はっきり女子大生とその専有物的に結び付けて伝わっていたかに思われる。とくに高級でもなく偏頗でもない読者層に対して、好奇心或いは好

事象的興味といった所を越えて通常の男女間の色模様には匹敵するうけは無い。理でも、途惑わせる程のことはなかったのではないか。

しかし又同時に、「魔風恋風」でのそれはどう考えても作品の主題ではなく、また、主人公にとっても最も強烈な感情、最大関心事ではなかった。作品の主題は芳江の許嫁をめぐる三角関係であり、同性間の愛の究極的目的は恐らく三角関係の悲哀を増し葛藤を複雑化することであって、精副主題といったものに止まる。

ここでの女二人の仲は、△妹▽への特殊な感情ゆえのⅡ単なる親友を裏切る罪悪感とは別種(の筈)の懊悩もさして無くその許嫁と契ってしまう、初野の描かれ方の御都合主義と似而非ゾライズムのお粗末さを措けば、芳江の方は母親に対して「(良人を持った後も)萩原様とは終身の友達だわ」と、また許嫁に向かつては「他の事なら何様な事でも、決して兄様の言葉を背きませんからね、何卒、初野様の事だけは」自分の意に任せてくれと言ひ張る。のち「母から、東吾(許嫁)と初野の間に可厭な関係の有る談を聴いた時は、初野を怨めしくも思つた」ものの、若しそれが事実だったらもう聲は取らずに「一生独身で暮すわ」と言ひ切りはする(これは許嫁への愛の方が主だろうが)が、それ以上初野に鋒先が向くことはない。代りの縁組みを迫る親の許を逃げ出すと、当の初野に「何卒か、私を、隠匿つて」「私、義姉さんの傍で一生を送る心算」と泣きついて行く。最後に一切を告白した初野が脚氣衝心で息を引き取ろうとする際にも、芳江はあらためて

義姉さん、私はね、何処までも義姉さんの妹ですよ、ね、宜うござんすか。

と言ひ聞かす、少なくとも△妹▽の側の心深さは「あきらめ」のそれに比肩し得そうにも見える。

しかしながらそれはあくまで、許嫁に対する心深さと併存する情として、併存し得るものという前提(仮定)の下での、心深さである。許嫁が戻ら

ない場合を覚悟する際にも、単に許嫁を失うのではなく△妹▽に奪われるのだがそれでもいい、といった、許嫁と△妹▽とを直接対決させ択一して決心してはいない。

許嫁と△妹▽、異性愛と同性愛とが本質的に両立するものかどうかという抽象論とは違って、げんに対立をつきつけられ択一を迫られたのに、△妹▽の介在には目をつむり許嫁だけの問題として対応してしまったという事は、両立Ⅱ併存を恐らく否定(どちらを択るにしろ)しなければならなかった筈の機会を回避して来ているゆえの併存可能ムウドにすぎない、ということである。もしも回避せずに択一したら△妹▽Ⅱ同性愛を選んだかも知れないとしても、それは何ともいえないことである。

だが、択一の機会を回避したのだから芳江自身は意識せずに済んでいようが、客観的に云えば、前引、母親や許嫁に向かつての初野との交際安堵の懇願は、△良人▽△兄様▽の存在、彼への従属を大前提としていよう。芳江がより強く望んでいる愛が異性のものか同性のものかは別として、ともかく動かし難く存する条件は△いづれ良人を持つ▽こと乃至△兄様▽であり、△妹▽はその下でのオプションとして必死に願われている(熱望されてはいるが、あくまでオプション)のである。

恐らくそれが、異性愛(↓結婚↓家族、繁殖↓子孫の存続)を存立の基盤とする市民社会に於て大目に見られるための、ぎりぎりのあり方であろう。異性愛との両立併存など考えてもみず、その介入(三輪の醜聞、染子の許嫁)によって滅びることを当然として△あきらめ▽るのは、共存の拒否という点では不遜、自滅の肯定という点では不健全ということになるに違いない。しかし同性愛が、△性愛▽としては異性愛と並ぶもう一つのものであってその意味では序列はなく、又、女性の場合、少なくとも日本近代にあっては父権秩序からの自己防衛、離脱の意味を持って行くことからすれば、「あきらめ」でのあり方が純正なのであり、「魔風恋風」でのそれは市民社会(Ⅱ新聞小説の読者層)への些か不潔な妥協又は迎合(多

分無意識の)、或いは、そこまでも行かない作者大外の認識の極度な浅薄——風俗現象として、文字通り目にとめる程度を出なかつたこと——の結果とすべきものである。

そうした△前史▽から見ると、ひよっとしたら「あきらめ」——少なくとも初出時の——は、異性愛と(未だ)交錯せぬ少女的レズビアニズムそのものを一篇の柱となし、しかもそれを、限られた理解者や特定年齢層(少女などの)ではない一般大衆読者の前に艶麗に描き上げた点で、日本近代小説に一つの新しい分野を拓いたものといえるのかも知れない。

しかもこの作者自身も、この作品以外では同じレズビアニズムを扱っても前引「春の晩」他のように、或いは容姿の美や肉感をもっぱらにし、或いは男友達(「春の晩」・夫または「一旦結婚しやうと決心した」相手「悪寒」・「忘れられない」別れた男「憂鬱な匂ひ」)等との異性関係と、並置されている(処女作「露分衣」(明36)のまさに“少女趣味”的な嫂と妹との交情も、兄と嫂の夫婦仲という一つの異性間関係と交叉していた)。「あきらめ」のように全く異性関係を排除し、かつ、肉欲も保持しつつそれに傾かない純情型の同性愛が、少なくともこれだけの規模と位置づけを以て描かれたのは、これ限りだったようである。その意味ではこの作者にとっても成るべくして成ったとは做し難い、狂い咲きの大輪であつた。

註1 用語を通じての抱月への接近の他に、昭和女子大刊・近代文学研究叢書十五卷(昭58・12刊)『田村俊子』では

審査員の評価は、露伴83点、抱月80点、漱石80点で、露伴の点が一番高かつたのである。それなのに何故作者は、あえて「選をした内の一人は向島の師匠(露伴)もゐた。その人の点の少かつた為に、みのある(俊子)の仕事は危く崩れさうな形になつてゐた。」(引用者註、「木乃伊の口紅」、大?・4『中央公論』)といい、「他に二人の選者がゐた。その人たちはみのある

作を高点にしておいた。」と、事実を逆転させたのであろうか。そして作者は「義男(田村松魚)は口を極めて向島の師匠を呪つたりした。さうして却つてこの人に捨てられた事を義男はみのあるの為に祝福した。」とも書いている。現実には、当時の文壇の情勢から、自分の方が露伴から離れようとしたのであろう。

(執筆大塚豊子氏)

と推定している(もつとも、大阪朝日明43・11・11「当選小説披露」によれば露伴の点は「あきらめ」に入つた各選者の点の中では最高だが、予選通過九篇に露伴が付けた点は最高九〇点、「あきらめ」の点は下から二番目(同点三篇)で、他の二選者は各自の最高点を与えているのだから、俊子の怨みも一つの言い方感じ方であらう)。又、「木乃伊……」ではその△高点を与えてくれた▽二人の選者を訪問した際、抱月に相当する人物は「あれは確に芸術品になつてゐます。いゝ作です。」と褒め、持参した原稿も預かつてくれるが、もう一人の森田草平らしい人物の方は、自分が他の作品と三三〇点差をつけておいたので当選したのだと説明している。恩顧を蒙つたのはむしろ草平の方と云つていられるようにもとれるが、或いはそこまでの序列意識はなく、漠然と、自然主義・反自然主義どちらの新時代の文学からも支持されたのだ、というデモンストレーション(又は両勢力へのアピール?)であつたらうか。

(参考) 大阪朝日掲載の採点表

	露伴	抱月	漱石	平均
あきらめ	八三	八〇	八〇	八一
父の罪	九〇	七〇	六五	七五
港	八五	六五	六〇	七〇
覚醒	八三	七〇	六〇	七一
強烈	八三	七〇	五五	六九
減退	八〇	六二	五〇	六四
人の世	八七	六五	五〇	六四

誰の家 八七 七八 四五 七〇
 人か神か 八五 六二 四〇 六三

2 第一章に、退学の決意を固めながら「二年馴染んだこの桜も春を謡ふ三度目には逢はずに、葉の黄ばみかゝつた今（この作品の季節は秋の初めから十二月初めまで）を別れの最期と思ふ」と、また第二章には「来年、卒業が出来るのと思ふと」とある。因みに富枝の在籍校のモデルと思われる日本女子大学校（作者自身も創立頭初一学期（一説に二年）在学）は明治三十四年の創立以来大正五年度まで大学部は三年制であった（『日本女子大学校四拾年史』、昭17・4同校刊）。

3 何日か前（正確な日数は不明だが少なくとも数日以上前）の岐阜の継母の上京（六十八回）を「もう十一月も終つた頃」のこととしている。

4 『日本女子大学校四拾年史』（前出）による。もっとも、少し前の三十九年度には一、〇一一名を数え（同書）、日本女子大を一往それらしくモデルとした小栗風葉「青春」（明38・3〜39・11読売新聞）にも「一千の妙齢を収めて、東都才媛の府と称せらるゝ」「小石川の成女大学」というイメージが見える。

5 明治三十年代末の主要紙の発行部数は「大朝三五万、東朝一七万、読売四万、大毎三万、東日二万」（日本近代文学大事典四卷〈新聞小説〉、玉井乾介氏）、二六新報が三十年代半ばに十数万（伊藤整『日本文壇史』七卷）という。

なお、「あきらめ」初出本文は掲載紙マイクロフィルムに、同刊本本文と「春の晩」他は各初刊本を底本とするオリジナル版『作品集』に拠った。

（平3・8・31稿）